



TITLE:

<批評・紹介>村田治郎著 中國の帝都

AUTHOR(S):

伊原, 弘

CITATION:

伊原, 弘. <批評・紹介>村田治郎著 中國の帝都. 東洋史研究 1982, 41(1): 126-130

ISSUE DATE:

1982-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153846>

RIGHT:

館)。また、『史記』、『商君書』に對しても、著者は共通する立場をとっている。第十二章で著者は『呂氏春秋』について言及する際、『史記』呂不韋列傳の記載をそのままとり入れているが、現行本『呂氏春秋』が果して『史記』呂不韋列傳に記された通りのものなのか、否時代を追って附加され、より雜^雑的要素が加わったのか、詳細な吟味が必要ではないだろうか。すべて、先秦の文獻史料を扱う場合、その史料がもつ魅力と恐さの二面に慎重でなければならぬと評者は考へる。

問題の第三、これは評者の希望であるが、著者は本書の中で日本の學者の研究成果、それも近年の成果を二、三紹介している。事實、著者自身、外國の研究情況の攝取に誠に熱心である。しかし、國外的研究成果に關する情報を手でできるのは、まだまだ少ないと聞いている。方法論、問題設定の違いがあつても、またあればこそ、より多くの情報の交換がなされることを希望してやまない。

私事にわたって恐縮であるが、私は昨年一九八一年九月から十一月にかけて、西北大學に留學していた。その時の私の指導教官が本書の著者林劍鳴氏である。氏の溫厚な人柄、研究にうちこむ眞摯で熱心な態度に引きこまれ、この書評の中で禮を失した箇所があるのではないかと、私は恐れる。

一九八一年二月 上海 上海
人民出版社 A5版 四七一頁

村田 治郎著

中國の帝都

伊原 弘

本書は、中國の都市・建築問題に多年とりくんでこられた村田治郎氏が、あらたに書きおろされた論稿とすでに發表をされていたものに補訂を加えてなつたものである。歴代王朝の首都すなわち帝都の都市プランを追求めたものである。特に第一章の「中國帝都の平面圖型」は、著者の多年にわたる研鑽と蘊蓄を傾けたもので、量的にも最大のものとなっている。

折しも、都市問題が大きな注目を浴びている時である。こうした際の關心は單に今日的關心にとどまらず、時代を溯り空間的にも擴がっていく。日本史の分野で我國の都市の祖型を求めて盛んに研究がおこなわれているのも、こうした事情の反映であらう。このような時にはやはり我國と深い關係のあつた中國の都城制のトータルな研究・論著が必要となるが、我國の中國史研究者がこうした要望に必ずしも充分に答えてきたとはいえない。したがっていま、最近のめざましい中國の都城研究の成果の紹介をもかねあわせた書が、單に中國史の專家のみならず日本史の研究者をも含む東アジアの都城制研究者から希求されているといつても過言ではあるまい。

本書はこうした學界及び讀書界の要求に答えたもので、時宜を得

た書である。以下、逐次、紹介をしていこう。

二

本書は以下の内容からなっている。

第一章 中國帝都の平面圖型

第二章 鄭都考略

第三章 金の上京會寧府城の遺跡

第四章 元・大都における平面圖型の問題

第五章 渤海國上京龍泉府城の遺跡

第六章 中國文化と日本の平城京

後記

すでにのべたように、本書の中で最大の論稿で主眼となるのが第一章で、第二章以下の各論ともそれぞれ深い關係をもっている。本書の、というより第一章の特色は、大量の都市圖、それも出来るだけ實測・復原圖を投入してまず事實を提示し、その分析から結論を出していこうとする方法である。收録された五十三の都市圖のうち、實に四十六の圖が第一章に投入されている。それらには中國側の發掘報告と關連した圖も多く、これらの代表的なもののみならず、あわせて都市發掘・研究史を整理する事にもなっていて便利である。論の基調は、個々の帝都（首都）に對する細かな考證・記述にあまり拘泥せず、まず具體的事例を提示し、那波利貞氏「支那首都計畫史上より見たる唐の長安城」（『桑原博士還曆記念東洋史論叢』、昭和六年一月）以來、強い影響力を持つ中國帝都の理念を『周禮』冬宮考工記に求める説の検討をはかったものである。

周知のように、周禮は慎重な配慮が必要な書であるが、著者は漢

以後を検討對象にして「華北地域における王城で、王城全體が方形もしくは方形に近くて中心附近に宮闕があること」でその他の事はそれに伴う要素にすぎない、と周禮に示された王城の建設プランを要約される。また宮城においては、南北二城設置とその位置検討を骨子とする。この上立って中國史上の主要な都市の關連を考えるのである。とりあげる都市は、古代より近代まで、統一時代・分裂時代を問わず、また各征服王朝の首都をも包含し、幅廣くとりあげられている。そしてこれらを、周禮の示す都市プランの検討を基礎に系統的に追っていく。これはまた同時に、中國の帝都を一つの流れに整理した型ともなっている。こうして整理されたものを見ると、一口に中國帝都の都市プランといっても様々なレイアウトがあるのが判ると共に、從來のような長安・洛陽・開封・北京といった單純な分類・認識では整理しえないのも判る。そしてこの整理の上で、中國の帝都で周禮にそったプランをもつのはわずかに明以後の北京で、それも元の大都の改造の結果出来たとされるのである。

この様な見解や中國の帝都を幅廣い視野と角度からとりあげていく方法は、我國の古代都市の祖型を求めていく際にも大きな刺激を與えることになる。しかし、論の基調が周禮の都市プランの具現の検討、それもおおむね宮城の位置の検討を中心としたレイアウト面での検討を念頭にしている爲に、他の要素についての考察がいささか手薄になっているのは否めない。『周禮』冬宮考工記に示される都市プランが中國傳統の集約として注目すべきなのは勿論であるが、都市には往々にしてその民族のもつ宇宙觀・世界觀・方位觀・宗教觀が盛り込まれているものである。またそれなりの理論もある。帝都には特に古代になる程、この傾向が反映されている。こ

の點への言及が乏しいのはいささか寂しい。

春秋戰國時代の都市プランについても、墨子・管子などの理論があるが、それが秦漢時代の都市への移行過程でどうなったのか。秦の都城を例にとっても、墨家と關連して論ずる説（渡邊肇「墨家の守禦した城邑について」『古代中國思想の研究』所收、昭和四十八年三月）もあるし、始皇帝以前の咸陽が張儀の手になる成都と似かよっていたとする『華陽國志』の記述も知られている。さらに、この時期の秦樂陽城や楚皇城を、唐長安城ひいては我國の都城の先驅的プランと見る説（飯島武次「東アジアの都城の系譜——鄭州故城から平安京まで——」古代學協會『日本古代學論集』所收、昭和五十四年三月）もある。似ているというだけで帝都への流れの中で考えるのはむずかしい所であるが、今少し言及の欲しい所であった。

ところで、漢以後は儒教的觀念が強くてくる。とすればこの時期の長安城は都市プランの上で一種の分水嶺ともなるが、わずかに始皇帝の例をもひきつつ天文説を紹介して頭から否定する事の危険性を指摘するにとどまっている。だがこの外に風水説・社稷・各種廟の配置・南北郊祀などの問題を前述の要素と共に、周禮型の都市プランとあわせて以後の流れの中で考えていく必要がある。天文説一つをとっても、中國の都城には關連した名前が多い。宋の開封でも汴河と御街の交叉點にかかる橋を天漢橋とよぶ。同様の例は唐宋時代を通じての洛陽城にも見られる。これらは單なる慣習として使用されていた可能性も高いが、それが後々まで使用され後世の都市へ流れ込んでいく過程が知りたい所である。すなわち、中國帝都の理念として周禮型都城の檢討が重要であればあるだけ、そこに集約されていく過程を詳しく知りたいと思うのである。

とはいえ、大量の圖版の紹介とその檢討によって中國の都市プランを論じ、從來は中國傳統に反したとされていた唐長安城が現實面から見ると傳統的都市プランで、むしろ周禮型の都市プランこそ例をみない。周禮型の都市プランは元大都の改造によって出現した、とされるのは注目すべき見解である。從來、長安が中國を代表する都市で傳統の一端を擔っている事を認めつつも、周禮に示される型と懸離れしかも同類の都市がすくなく以後に傳わらない事から、ややもすれば特殊例と捉えられてきた。しかし氏は、宮闕を北に置く長安は中國傳統の都市プランとされる。これは、今迄の固定的な考えに對する反證として注目すべきもので、前引の戰國時代の都市あるいは漢にうけつがれて子城を北に置く縱長の絳城の存在、引用の圖版が説得力を増す。が、實の所、こうした時には圖版の解釋による微妙な差がある。從來の解釋における差もそこにあつたろう。例えば私なども六朝時代の帝都について、建康の場合はやや觀念的圖ではあるが、圖をみる限り當時の都城制が北と南で異なっているように思える。もしそうなら、漢文化を濃厚にうけつぐ南朝と、必ずしもそうとばかりは云えぬ面もある北朝の都城制のかねあいをどう考えるかも問題になってくる。つまり、机上の理論を實現する場合にどの程度のゆとりをもたせたのかと云う點とあわせ考え、解釋を下す必要がある。圖版の解釋のむずかしい所である。

しかしながら、かく周禮の制を過大評價する事の不必要をといった本稿は、様々な理念が積み重ねられていたと思われる中國帝都の理念の解釋にかかっていた一つの鎖をたち切る事になったとも云えよう。そしてこの事は當然、我國の都城制の研究にもすくなく影響を與える事になる。

帝都は帝國の理念を具現するものであろう。だがだからといって、帝王とその周邊の一握りの權力者・エリート達とのみによつて成るものでもあるまい。傳統と現實の中に生きる中國都城制の研究を幅廣く考える必要を提唱された論稿と受け取りたい。

三

第二章以下はいずれも第一章の該當箇所と深い關係をもっている。

第二章、「鄭都考略」は、曹魏以後大きな意味をもった鄭について検討したもので、昭和一三年發表の論稿に後記を加えて成ったものである。鄭は單に魏の王國時代の首都というだけでなく、南北朝の争亂にも大きなかわりをもっており、漢以後の都市プランの變遷の中で考えなければならない都市の一つである。魏はまた、王莽は別として、以後の絶え間のない南北朝時代の禪讓劇の最初の演出者であった。この古典的な交代劇を再現し準備・演出していった集團の培った都市を考える事は、周禮の都市制度の變遷を考える事にもつながる。しかし、位置上の問題と宮殿などの配置を中心に通史的變遷を論じられたにとどまっており、意味や歴代のプラン上での役割りを考えるのはむしろ今後にゆだねられたというべきであろう。ちなみに、劉敦楨編『中國古代建築史』（中國建築工業出版社、一九八〇年一〇月）には「曹魏鄭城平面想象圖」が所収されており、本書所收の圖四八「曹魏の鄭城（鄭都北城）想定平面圖」と細部で異なるものの、大まかなプランや宮城が北壁に接續する型などで周禮型の都市プランと大きな隔たりをみせているのは一致する。

第三章、「金の上京會寧府城の遺跡」は、金國初の首都について

論じたものである。位置を比定し發掘史を整理し中國都城史上の位置附けを考える。昭和三年の論稿に手を加え、かつ補遺を加えたものである。遼・金と續く征服王朝の都市がどのようなプランに基づいていたのか、元の都市プランとも關連してはなはだ興味のある所である。プランに對する關心は南北二城を設けるスタイルの究明であるが、補遺でその建設の時期はほとんど同時期で遼の上京城の制を模倣したのではあるまいか、と現在の心境をのべられる。ただし、だからといって中國の都城制からの直接の影響を否定されないのは、この他にも第一章でもふれられているとおりである。

第四章、「元・大都における平面圖型の問題」は、現在の北京の祖型を論じたものである。大都及びそれを受けついだ北京は、中國都市の中でも論の多い方の一つであらう。從來、大都はそのプランを周禮によつたとされ、今日でもそのように論じるものが多いが、それを否定してモンゴルのオルドゥにその起源を求める。ただ残念ながら大都及びオルドゥの比較圖が挿入されておらず、文だけでは明確にその相似・差違を判別しがたい。一體に第二章以後は極端に圖がすくなくなっている。すでに第一章に投入された爲に重複をさけたのであらうが、やはりここは並列して圖示して欲しい所である。本書には圖版の索引が附されていないし、都市圖といつても精粗様々であるから、あえて重複を恐れず挿入しても良かったのではあるまいか。私はモンゴルのオルドゥの配置・意圖についてまったく暗いので、よけいにそう感じる。

ところで、常識的に考えると異民族ほど中國の制度を氣にしたのではあるまいか。中國に入り支配していく過程の中で、中國の諸制度・傳統の採用に極めて熱心な皇帝がでるのは、しばしば見られる

例である。これは勿論、當時の相克もあわせて考えねばならないので一概にはいえないが、この過程の中でより中國的都城（もつとも、今この際、何が中國的都城なのか問題なのではあるが）が出来ていく可能性もある。この様な傾向にモンゴル人が比較的氣薄であったのは事實ではあるが、國號選定の事情などが示すようにそうとばかりはいえぬ面も多い。單に大都及びそれに至る道のみならず、モンゴル人の建設した諸都市を廣く檢索した上で斷を下すべきであらう。

第五章、「渤海國上京龍泉府城の遺跡」は、我國の都城制とも深い關係のある渤海の都城についての解説である。二度にわたる發掘の様子とその成果をまとめたもの。

第六章、「中國文化と日本の平城京」は、日本の平城京のモデルを長安とする大方の説に對し、長安・洛陽兩方に深い關係があるとし、むしろ當初は中國の制度を充分にとり入れる事ができず、日本側の發展にもなつておおい複雑となつたとする。從來の我國の都市プランはややもすると長安起源説に流れがちであつたが、近年は北魏の洛陽城（內城）をモデルとする説も強くなつてきている。また中國側からは長安・洛陽複合説がでているが、これと通じる論稿である。昭和三七年の論稿に訂正増補を加えたもの。

四

第一章を中心に中國の帝都の都市プランを系統的に檢討する本書は、單に中國の都城制及びその理念の研究のみならず、我國の都城制の研究にも大いに刺激を與えるものとならう。整理され選擇された多くの圖版・發掘報告は、都市プランの變遷を一瞥のもとに知ら

しめるもので、これまた有益である。それだけに都市圖の索引が脱落しているのが惜しく思われる。各都市のプランを相互に比較檢討するには索引が必要で、本書の特色を一層いかす事になつたであらう。また、各都城の位置・關係を一括して示す圖表も欲しいところである。

それにつけても、著者の指摘の通り諸地圖及びそれらに類する資料の整備がのぞまれてならない。單に都城の研究だけでなく、社會・經濟あらゆる分野での地圖の活用は、今後も増す事はあつても減ずる事はない。しかもその様な方法は今後一層擴大し、航空寫眞や人工衛星からの寫眞をも活用するリモートセンシングの分野にまで擴つていくと思われる。こうした時にこれらの資料を採り歩き入手するまでが一仕事といったのでは、研究を軌道にのせる前に疲れてしまふといった事にもなりかねない。現に今がその様な時ともいえ、單にこうした視覺的資料のみならず關連し利用しうるあらゆるデーターの整理がのぞまれているといつても、過言ではあるまい。

以上、妄言を繋々のべてきたが、關心の隔たりや力の及ばない爲に、多くの讀み誤り、見當ちがいを犯していると思われる。著者の御寛恕を乞ふ次第である。後記によれば、著者は現在、目を患われ必ずしも充分な體調でないとのことである。一日も早い御快癒を祈念しつつ筆を置く。

一九八一年四月 京都 綜藝舎

A5判 三八五頁